

令和7年12月号



Health care Village SEIWAKAI

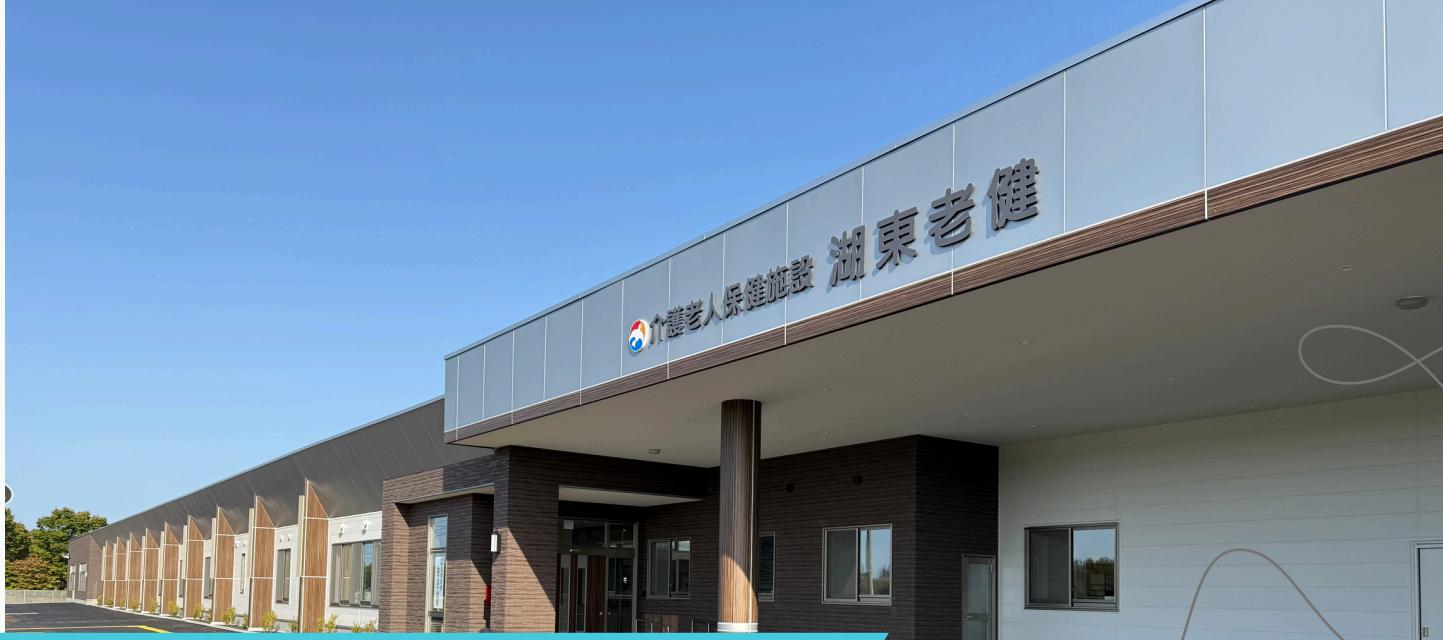
# 正和会NEWS



令和7年12月発行 発行元：社会医療法人 正和会



## 湖東老健 新築移転



2025年 10月25日 土 開所

令和5年7月の豪雨災害により大きな被害を受けた湖東老健は、皆さまの温かいご支援に支えられながら施設運営を続けてまいりました。

そしてこのたび、2025（令和7）年10月25日（土）に新築移転を迎え、再び新たな一步を踏み出しました。

10月15日（水）には、関係各位や多くのご来賓の皆さんにご臨席を賜り、晴天のもと竣工式が執り行われました。

また、10月17日（金）から19日（日）にかけては内覧会を開催し、地域の皆さんや関係機関の方々に新しい施設をご覧いただきました。

多くの温かい言葉と励ましをいただき、職員一同、改めて地域とのつながりの大切さを実感する機会となりました。

新たな湖東老健は、これまでの災害の経験を踏まえ、停電時にも稼働可能な自家発電機やガス設備を整備するなど、福祉避難所としての機能強化を図っています。

今後も災害に強い施設づくりを進めるとともに、地域の要配慮者の受け入れ体制を整え、安心して暮らせる地域社会の実現に貢献してまいります。

これまで支えてくださったすべての皆さんに心より感謝申し上げるとともに、新しい環境のもと、職員一人ひとりが連携し、より良い介護サービスの提供に努めてまいります。

湖東老健スタッフ一同



# 正和会グループ 第22回学術交流会を開催

令和7年10月2日、あきた芸術劇場ミルハスにて正和会グループ第22回学術交流会が開催されました。

冒頭では「今求められる組織の変革とキャリア自律について」をテーマに、作家・ジャーナリストであり社会福祉士でもある麓幸子氏を講師にお迎えし、特別講演が行われました。

また、今年は初の試みとしてパネルディスカッションを実施。

「今後求められる地域における役割を考える」をテーマに、参加者同士が活発に意見を交わし、地域連携の在り方を改めて考える貴重な機会となりました。

午後の一般演題発表では、グループ内外から多彩な取り組みが紹介され、連携推進法人からも初めて演題が出されるなど、発表の幅がさらに広がりました。

審査の結果、介護老人保健施設ほのぼの苑 介護福祉士職員による「介護現場における生活リハビリ定着を目指して」が最優秀賞に選ばれました。

会の最後には永年勤続表彰が行われ、長年にわたり職務に尽力された職員の功績をたたえました。

続いて、小林顕審査委員長より「いずれの発表も現場に根ざした実践的な内容であり、日々の努力が伝わる素晴らしい発表だった」との総評が述べられました。参加者全員が互いの成果を称え合う温かな雰囲気の中、盛会のうちに閉会となりました。



# – 障害があっても、地域の中で生きていく –

去る9月20日（土）、大館市中央公民館を会場に開催された、『令和7年度 第64回手をつなぐ育成会秋田県大会（大館・北秋田大会）』において、長年にわたる知的障害者支援に尽力した功績が認められ、秋田県知事表彰を受けた ほのぼの苑/小林 顕 施設長に育成会活動など、その歩みと想いについてお話を伺いました。

## PROFILE

### 小林 顕

Kobayashi Akira

昭和35年 秋田市出身

昭和60年 秋田大学医学

部卒業



平成4年～6年

スウェーデン・ルンド大学に医学研究のため留学

平成20年～

社会医療法人正和会 介護老人保健施設ほのぼの苑 施設長、同法人理事

令和7年6月～

公益社団法人秋田県手をつなぐ育成会 会長 現在に至る

## 息子の成長とともに歩んだ支援の道

支援活動の原点は、ご自身のご家庭での経験にあります。

「うちの三男は平成17年生まれで、言葉の発達が少しゆっくりでした。幼稚園に入ったころは先生の話がなかなか理解できず、飛び出していくのか心配したこともありました」と小林施設長。

当時お世話になった幼稚園の先生方の支えもあり、3年間けがをすることもなく過ごすことができたという事です。その後、小学校入学前の健診で県の医療療育センターを紹介され、そこで知的障害の診断を受けます。

「妻と妻の母親の意向で、最初は普通学級でスタートしましたが、やはり対応は難しかった。

妻が登校から下校まで付き添いサポートを続けましたが、2学期からは支援学級に移りました。その後いろいろとありましたが、今は元気に知的障害者就労継続支援事業所に通っています」と話します。

## 保護者として、支援者として

手をつなぐ育成会との出会いは、2011年の秋田市手をつなぐ育成会の新年会でした。当時、会長を務めていたのは中学時代の恩師・谷内和夫先生でした。谷内先生も、ご自身に障害のあるお子さんがいらっしゃいました。そんな恩師の誘いを受け、会員として活動を始めたのがきっかけだったといいます。

「谷内先生をはじめ、自分と同じように知的障害のあるお子さんを持つ保護者の方々と話す中で、“障害があっても地域の中で生きていく”ということを実感しました。面と向かって本音で語り合える場所があることは、本当にありがとうございました」と小林施設長。

その後、評議員に選任され、活動の幅を広げていきました。令和7年6月からは公益社団法人秋田県手をつなぐ育成会の会長に就任しました。以降、市町村育成会との連携や県全体の育成会活動を統括しながら、知的障害者の支援・啓発活動をさらに推進しています。

## 『こまちほ～ぷ隊』の結成と啓発活動

「知的障害のある方々への理解をもっと広げたい」との思いから、約10年前から小林施設長を中心となり始めたのが『知的障害児・者センター養成講座』です。

この養成講座では、そのころ既に実施されていた『認知症サポーター養成講座』にならい、知的障害に詳しい秋田県医療療育センターの医師による講演や知的障害者の保護者による自身の体験をもとにした勉強会を開催しました。

さらに2018（平成30）年には、山形県の知的・発達障害の理解啓発キャラバン隊である『花笠ほーぶ隊』に刺激を受け、秋田でも啓発活動の展開を始めました。

その後、2021年10月には秋田市手をつなぐ育成会独自の隊として、『こまちは～ぶ隊』を結成しました。

### 知的・発達障がい疑似体験 してみませんか？



『こまちは～ぶ隊』リーフレットより一部抜粋

知的障害や発達障害への理解を広め、当事者が生活しやすい地域をつくることを目的としたボランティアグループであり、手をつなぐ育成会の会員であるお母さん方が中心となり活動しています。小学校や地域行事での講演・体験講座を通じ、若い世代を中心に理解の輪を広げています。『こまちは～ぶ隊』の公演では、参加者が疑似体験を通して障害に対する理解を深める取り組みを行っています。例えば、軍手をはめて細かな作業をしてみたり、言葉での指示をあえて制限したりと、支援が必要な人たちの立場を体感できる内容です。

## 新たな挑戦—『あきた成年後見センターつなぐ』の設立

近年、核家族化や高齢化の進行により、親なきあととの生活支援などが課題となっています。

こうした現状を受け、小林施設長は秋田市手をつなぐ育成会の仲間とともに、2023（令和5）年、同会の権利擁護事業部門として『あきた成年後見センター つなぐ』を正和会の支援のもと設立。事務所は、ほのぼの苑内に開設されました。

さらに、2025（令和7）年2月には法人後見と身元保証の事業を一体的に取り組むため、これまでの体制を強化して『特定非営利活動法人トラストつなぐ』を発足。より安定した支援体制の構築を、秋田市手をつなぐ育成会と正和会の共同で進めています。



鈴木理事長（左2）らと『つなぐ』事務所前にて

## すべての人が安心して暮らせる共生社会へ

小林施設長は、「まずは『トラストつなぐ』を通じて成年後見の受任を目指したい」と話します。「成年後見制度の改正に合わせた組織体制の見直しや改善も視野に入れつつ、知的障害だけでなく、発達障害や精神障害、認知症の方々、さらには生活困窮者を含むあらゆる人々を対象に、世のため人のための活動を広げ、共生社会の実現を目指していきたいと考えています。

障害者支援も後見制度も、まずは知ってもらうことが第一歩です。知的障害は総人口の約0.5%といわれていますが、まだまだ一般的な理解は十分ではありません。誰もが安心して地域で暮らせる社会のために、できることを少しづつ続けていきたい」と語る小林施設長。その言葉には、長年の歩みと経験から生まれた確かな信念と温かい想いが感じられました。

# 厚生労働大臣 奨励賞 受賞 @介護老人保健施設 ほのぼの苑

介護老人保健施設ほのぼの苑は、

「令和7年度 介護職員の働きやすい職場環境づくり 内閣総理大臣表彰・厚生労働大臣表彰」において、厚生労働大臣 奨励賞を受賞しました。

今回の受賞は、

1. 音声入力が可能な介護記録システムを導入し、業務の効率化や時間外勤務の削減に取り組んだこと
2. 外国人介護人材の育成プログラムを整備し、寄宿舎の準備など住環境の支援を行っていること

が高く評価されたものです。

今後も、職員一人ひとりが笑顔で働く職場づくりと、ご利用者の皆さんに安心してお過ごしいただける環境づくりに努めてまいります。

